

## 文化芸術立国の実現のための懇話会（第2回）

平成25年5月25日

【近藤文化庁長官】 おはようございます。2分ほど時間前でございますけれども、第2回の会議を開始させていただきます。この種の会議で時間前に始まるということは余りないと思いますけれども、土曜日の午前中、時間前にお集まりいただきましたことは、これまで語られてはきたけれども、なかなか実行に移されてきたとは言い難い、この文化芸術立国実現に向けての下村大臣の強い思いに対する、大変前向きな、積極的な御反応だということで大変心強く思い、かつ感謝を申し上げます。

まずは、今日4名の先生方、先週御都合により御欠席でしたけれども、青柳先生、秋元康さん、それから宮田学長、黛まどかさん、4名の方が今日は御出席でいらっしゃいます。

それから、お手元にお配りしてあると思いますが、シャネルのコラス社長は、先週も、今週も、御出張で御都合がつかないということで、三、四枚のメモをお送りいただきました。とりあえずの日本語訳も添えてお配りをしてございます。後ほど簡単に私の方から御紹介をさせていただきたいと思います。

本日の段取りでございますけれども、前回に引き続きまして、私が進行役を務めさせていただきます。冒頭、大臣の方から一言御挨拶をさせていただきます。その上で河村次長の方から、お手元の資料——私ども、下村プランと呼んでおりますけれども、その先週の議論を踏まえて若干の修正を施してございますので、その点を中心に次長の方から簡単な御説明をさせていただきます。

その上で、きょう初めて御参加いただいた4名の先生方、先ほど御紹介いたしました4人の委員の方々から、最初に御発表、御意見を賜りまして、その後、自由討議ということにしたいと思います。

また、たくさんの傍聴者の方に来ていただいておりますので、せっかくでございますので、傍聴者の方々も御登録いただいたメールのアドレスを通じて御意見を賜ればと思います。一応今月中をめどということにしまして、傍聴者の方々からも自由な御意見をいただければと思います。

それでは、まず大臣の方から一言御挨拶を頂きます。

【下村文部科学大臣】 皆さん、おはようございます。本日は御多忙のところ、第2回

になりますが、文化芸術立国の実現のため懇談会、御出席をいただきましてありがとうございます。第1回の懇談会でも、幅広い観点から御意見をたくさん頂きました。さすがに第一線で御活躍をされている皆様方だけありまして、すぐそれをお手元に配付させていただいております資料3ですが、文化芸術立国中期プランの中に相当追加で入れ込みをさせていただきました。皆様方の貴重な意見をこのまま中期プランに反映するというので、こちらも前向きに対応してまいりたいと思います。

きょうは冒頭、私の方から委員の皆様方に3つ申し上げたいと思います。まず1つは、先日、教育再生実行会議、これが今年の1月から安倍内閣が発足して立ち上げたわけでございます。これは、安倍内閣における内閣の最重要課題が経済再生と教育再生であるということから、これから教育再生に対しては大変力を入れていこうという中で、官邸に教育再生実行会議を立ち上げました。私は文部科学大臣兼、この教育再生担当大臣でもございまして、教育再生に力を入れていきたいと思っております。

既にこの教育再生実行会議では3回目の提言を頂いております、この3回目の提言を受けてすぐ、数日前に産業競争力会議で私がこの教育再生実行会議の提言に基づいたプレゼンをしております。この産業競争力会議でもプレゼンをしておりますし、それから経済財政諮問会議でもプレゼンをしております。つまり、政府が一体となってこれから取り組んでいくという中で、具体的に先日の産業競争力会議では、グローバル人材の育成という観点から、今日本の大学が全般的にこのまま地盤沈下をしつつある中で、本当に世界の中で通用する、留学生の送り出しも、また海外からの留学生も倍増する計画の中で、そもそも抜本的な大学改革、これは質と量ともに充実させるという中でやっつけいこうという中で、特にグローバル人材の育成ということをプレゼンいたしました。

その中で、同時に問われるのは真の国際人。このためには、英語も TOEFL 等の活用というのも入っておりますが、1つのこれは世界共通語になりつつありますから、いい悪いは別にして、きちっと子供たち、学生に英語力を付けさせるということは大切なことであると思います。しかし、語学力だけでなく、真の国際人になるためには、同時に真の日本人としてのアイデンティティーを持たないと、英語力というのは1つのツールですから、それだけ身に付けて国際人になれるわけでは、当然ないわけであります。

真の国際人になるためには、逆に、今まで以上に日本の伝統文化や歴史、こういうことをきちっと深く学んでもらって、世界の中で日本人として誇りを持って諸外国の人たちと同等の議論ができるような、今まで以上に日本人としてのアイデンティティーとしての文

化や、歴史や、芸術を学ぶということに対して教育力を付けるということが必要になってくると思います。これが1点でございます。

それから、2点目は、前回もちょっと申し上げましたが、今年、25年度の文化庁の予算は過去最高額でございまして1,033億円。しかし、残念ながら、前年度比でいうと1.4億円増えた程度でございまして、このままのペースでいくと、10年たっても10億円予算が増えるかどうかということでは、本当の文化芸術立国として発していくということは絵に描いたもちになってしまう。そのために、この文化芸術立国としての懇談会を先生方、委員の皆様方をお願いをしているわけでございます。

これを本当の名実ともに、予算も含めて、我が国を文化芸術立国にしていくためには、国民の皆さんに共有していただくような具体的な理念とビジョン、それを明確にする必要があると思います。5年後、日本は文化芸術立国としてどういう国になり得るのかと、そして、それは世界に対して我が国がどういう位置づけになるのかということについて、具体的に、なおかつ詳細に、そして共有できるような文化芸術としての立国論を打ち上げる必要があると思います。そのために、是非お知恵をおかし頂きたいということで、この懇談会を立ち上げたということがございます。

そして、同時に財源論ですが、これは、きょうはなかなかそこまで議論ができないかもしれないけれども、しかし、今我が国の財政規律が更に求められる厳しい中で、経済再生によって景気浮揚になったとしても、そう簡単に財源が増えるということにはなりません。

例えば、2020年東京オリンピック・パラリンピック招致に向けて、なかなか文部科学省のスポーツにおける予算は、これは実は文化芸術立国よりは更に少なく、3分の1ぐらいしかありません。これをカバーするために、**toto**、スポーツ振興サッカーくじ、こういう別の部分から積極的な財源を確保しようということで、この**toto**、スポーツ振興くじも、これは議員立法ですけれども法律改正して、今までは日本国内のサッカー試合が対象でしたけれども、今度は海外も対象にすることによって大幅に財源を増やして、その中の何割かをこのスポーツ振興の方に出してもらおうということで、別のところからポケットを作って財源を確保するということが既に始まっております。

私は実は超党派の国際観光産業としてのカジノを考える議員連盟の副会長もしております。我が国で今後、法改正をして、ただのカジノではなくて国際観光産業としてのカジノですけれども、もし全国で何か所か造れるとしたら、その売上の相当部分を、例えば文

化芸術に特化した財源として活用するというを入れるべきではないかということで、議連でも提案しておりまして、これは一定の理解が得られるところではないかと思っております。国税と、そこで実施する地方税の中で、そういうふうの特化した中、例えばの話ですけれども、何か別の形での財源を考えることによって、今までの延長線上の発想ではなくて、できたらフランスや韓国のような前年度比0.何%レベルではなくて、5年後には数倍になるような、そういうレベルで持っていかなければ、本当の芸術文化の発展にはならないのではないかと思います。それは今後の、つまり財源問題というのはやはりきちっと、我々も自ら財務省に任せるということではなくて、考えていくということが必要だと思います。

そして3つ目に、実は前回の委員の皆様方の意見を反映して、後で河村次長から御説明をさせていただきますが、新たにこの2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に併せて、日本中が魅力的な文化イベントを開催するという提案を入れ込みました。実際のところは、今年の9月7日にブエノスアイレスで、今3都市が立候補しておりますが、東京になるかどうかということが決まります。

実は、私はこのプレゼンがものすごく重要ではないかと思っております、9月7日、ブエノスアイレス、東京オリンピック・パラリンピック招致のとき、きょう御議論していただくようなものを政府のプレゼンとして、安倍総理をはじめ入れ込むと。つまり、ただ2020年東京オリンピック・パラリンピックは、スポーツにおいて勇気や感動を国民や世界中に提供するというだけでなく、スポーツの祭典を通じて、同時に我が国らしい芸術文化を全国津々浦々、もちろん東京を中心に同時開催等をするによって、世界中の人たちを呼び込む。

それを、実際7年後ですから、これからタイムスケジュールを作る中で、それを1つの目標設定として付加価値を付けるような、今までのロンドン・オリンピックでもそういうイベントを結構したということは承知しておりますが、それ以上に、オリンピックそのものをもっと人類の本当に祭典として付加価値を付けるような位置づけを新たなコンセプトとして織り込むことができないかどうか。

私もオリンピックの担当の大臣でもありますので、3月にオリンピック招致委員会、IOCが来たときプレゼンもさせていただきましたが、今接戦でございます。日本が、そして東京が勝ち抜くためには、更にプラスアルファの何らかのプレゼンといいますか魅力を付加しないと、そう簡単に招致するのは難しいのではないかという思いを持っております。で

すので、この部分も、是非きょう委員の皆様方からお知恵をお借りできれば、またそれを今後のオリンピック招致のプレゼンの中でも活用できるようなものを考えられれば、更にすばらしいものになるのではないかと、そんな思いを持っております。

今回初めて4人の委員の方が御出席をさせていただいております。是非忌たんのない御意見をいただきながら、これから本当に21世紀は、日本は芸術文化立国の国になると、そして、それは世界に、人類に貢献できる日本らしい、すばらしい、そもそもそういうものを持っている、それを発揮するときであると。近藤長官の言葉をお借りすれば唐の時代の長安のような、そういう日本、東京。東京だけではありませんが、日本をどうつくるかという文化芸術のハブとなる、中心となる。それは伝統文化だけではなく、今の、あるいはこれからの大衆文化を含めたありとあらゆる部分で、人々が日本に一度行ってみたいと、来てみたいと、そして、そういう芸術文化に触れてみたい、そういう国をどうつくっていくかということが日本の発展につながるのではないかと思いますし、是非忌たんのない御意見をいただければ大変有り難いと思います。どうぞよろしく願いいたします。

**【近藤文化庁長官】** 大臣、ありがとうございます。大変力強いお言葉をいただきました。ありがとうございます。

それでは、河村次長から、簡単に下村プランの現時点での内容につきまして、御説明させていただきます。

**【河村文化庁次長】** 文化庁次長の河村でございます。よろしくお願い申し上げます。

資料3を御覧いただきたいと思っております。前回の資料に、前回の懇話会でいただきました御提案や表現を入れさせていただいた修正と、細かいところでは、文意をとりやすくするために一部技術的な修正、言葉の入れ換えなどを行ったところがございますけれども、前回の懇話会の御意見を反映したところを中心に、ポイントを御説明申し上げたいと存じます。

1枚めくっていただき、表紙の次、2ページですけれども、基本的な考え方、今大臣からも申し上げました、文化芸術の力を生かしていくことが文化芸術立国ということでございますが、3つ目の丸で「文化芸術立国」は、文化芸術の持つ力、人間形成や社会に及ぼすプラスの力、また世界の中で日本が貢献していく力になるわけですが、こうした力が現実の生活において国民社会に広く浸透し、活用できる仕組みを作り、新「国風文化」を日本再生の柱とすることとしております。

この「国風文化」という言葉は前回の懇話会で複数の委員の方から頂戴した言葉でござ

いますけれども、特定の分野とか内容を指すということではなくて、文化の力が国の力として顕在化している。鑑賞者にも支えられ、鍛えられて、伝統を受け継ぎながら創造される多様な日本の文化が国の力として顕在化している、そういう状態を指しているものというふうに理解をいたしております。その言葉を入れさせていただきました。

次のページは特に変わった点はございませんが、2020年の姿として、多くの人々が日本の文化を訪ねて交流してくださる、世界の文化芸術交流のハブとなるというイメージを掲げております。

1 ページ飛ばしていただきまして、これを実現するための流れを5ページに、この現下村プランのコースを掲げております。2020年を1つの目標年次としているということを前回申し上げましたが、その文化芸術立国に向けて進む第1段階という位置づけだけではなくて、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に併せて、日本中で魅力的な文化イベント、日本の伝統を生かしたもの、現代アートを生かしたもの、こうした文化行事が日本のそこら中の市町村で展開されていくという、そういう形を描きたいという提案でございます。

このために、その年次に向けて計画的に文化力を強化していきたいということでございます。大きく文化が人をつくる、文化をつくる人をつくる、そういうパート、それから地域を元気にする、社会全体での文化を大事にする機運という2つ目のパート。それから、世界の文化交流のハブとしての様々な取組。それを横断的に施設や組織、制度で支えるという、こうした枠組みで以後の施策案を形成しているものでございます。

人をつくるというところでは、文化芸術で想像力——想像力という造語になっておりますけれども、委員からクリエイティビティーということだけではなくて、受け手としての力を育てることも重要なのだという御提案をいただいたことに対応した言葉でございます。また、ファシリテーターや、つなぐ人材ということが大事だということもございます。

3つ目の丸で、高度な芸術家育成、伝統芸能等の後継者・伝承者の養成と書いておりますけれども、ここは現代の芸術文化と伝統芸能を必ずしも分野として分けるという意味ではございません。伝統芸能の人たちを育てたり、その方々の発表の場を設定するときにも、現代の芸術文化や、あるいはポップカルチャーを専門としているプロデューサーの方が企画したり、創作をしたり、一緒になって創作をするという試みも視野に入れていくというふうにお考えいただければと存じます。

2つ目の地域を元気にするというところでは、文化財保存をしっかりと全体の基盤として

やっていく必要があります。また、地域の文化資源、これも自然景観もあれば、伝統文化もあれば、新たに作られるお祭り、フェスティバルもあるという、広い意味での文化資源でございます。こうしたまちづくりが進んでいって、また、そうした市町村がネットワークをつくり、全体として日本の力としていければという案でございます。

3 つ目の文化交流のハブとなるための取組のところ、伝統芸能や工芸の発信が大事だという提案に対して、更に委員の皆様方からは、日本の生活文化、衣食住にかかわる文化——和装ですとか、日本建築の中の様々なものも傳承されていく必要があるという御発言を多数頂戴しておりますので、ここも入れております。また、その次の「ジャパン・フェスタ」、以降の資料にも出てまいります。これは固有名詞というより、分野を限定しない日本文化の総合紹介の場に1つの通称を付けてみたものとお受け取りくださればと思います。それから、国内フェスティバル・国際会議でございますけれども、これは例えばアーティストが世界から集まってくる場ですとか、創造都市を目指す都市のサミット、こういったものをイメージしたものでございます。

以降、時間をとってあると存じますけれども、ざっと御覧いただきますと、人をつくるというところの施策の柱案が6、7ページでございます。先ほどの創造力・想像力という両方の造語を入れております。

また、子供たちに芸術文化に触れてもらい、伝統文化をしっかりと受け継いでもらうための機会を多く持ちたいという議論の中では、音楽、演劇、舞踊といった芸術文化や伝統芸能の分野のほか、茶道、華道、また、先ほど申しあげました衣・食・住にかかわる文化というものも多く触れる機会が必要だという御提言をいただいております。

また、こうした子供たちへの文化に触れる機会の提供については、丸の3つ目でございますけれども、現在ある資源をもっと生かすべきだという御発言をいただきました。例えば地域にある芸術系の大学がもっとその地域への、又は様々なネットワーク、連携を持つ地域での子供たちや地域の人たちへの働き掛けができるのではないかとということも頂いておりますので、こうしたことも追求をいたしております。

7 ページも、このピンク色のアンダーラインというところが、前回、懇話会の御意見を頂戴して加えた部分でございます。現在ある資源を最大限生かしていくべきだという御発言を多く頂戴しました。

それから、8 ページ、9 ページは地域の関係でございます。8 ページの一番上は文化財の適正期間による保存修理が必要だということですが、2 つ目のまちづくりの推進の

ところでは、文化遺産、先ほど申し上げました伝統文化にとどまらず、現代にいろいろ立ち上がってくるお祭り、フェスティバルなどを生かしたまちづくりというものもあるわけがございます。これに関連して、共通の文化資源を持つ自治体間の連携。具体的には治水の神様の話を取り上げて構想をお話しくございましたけれども、共通の文化資源を持つ自治体間が、個別のそれぞれの市町村で何かをするということにとどまらず、連携してネットワークで地域おこし、あるいは世界への発信ということもできるのではないかという御発言をいただいての柱を起こしたものでございます。

それから、9 ページ、一番下のところでは、もっと文化財の公開・活用に ICT を積極的に、現代の最先端技術を使って行うべきだという御提案。それから、失われた文化遺産、具体的には江戸の町並みのお話を頂きました。すぐにその町を立ち上げるとか、伝統的建造物群の復元ということがなかなか難しゅうございますが、これを ICT で何かの工夫ができないかというふうにごで入れ込んでおります。

その次の 10 ページ、11 ページから 12 ページにかけてが、世界の文化交流のハブとなるというところ。一番上の日本の伝統工芸・芸能や生活文化の発信に関しては、ポップカルチャーのような、より非常に多くの人たち——これは日本の中でも、世界でもそうかと思いますが、若い人に極めて自然に取り入れられているポップカルチャーとうまくコラボレーションした形で、日本の伝統芸能や伝統工芸、生活文化といったことを国内外で発信することを工夫すべきだという御発言を受けて、ここに新たな記述を入れております。そのほかにも、同様の御発言、総合力、融合ということを加えまして、幾つかの修正をさせていただきます。

次のページでございますけれども、12 ページには、やはり世界の文化交流、世界への発信というところで、文学・文芸への発信について、実は昨年まで行っておりました日本文学翻訳事業がいろいろな事業仕分の関係で一時見直しということになっていることについて、やはり何か新たな工夫を加えて行っていくべきではないかという御発言を頂いておりますので、このことについて書かせていただきました。また、ICT を活用した日本文化の発信強化。文化庁のホームページもいま一つ、まだ魅力に欠けるといふ厳しい御発言を頂きました。これを受けとめて書かせていただいた 1 行でございます。

そのほか、次のページには、特段の修正は入れておりませんが、日本のこれからの文化の継承、発信のためには、国立の文化施設もしっかりと機能強化が必要であるということも、また提案などを頂ければと思っております。



簡単でございますが、以上、対応を御覧頂きました。ありがとうございます。

【近藤文化庁長官】 それでは、討議に入りたいと思います。先ほど申し上げましたように、最初に、先週お越しいただけなかった4人の委員の方々に簡単に御発表をいただきまして、その後、自由討議にしたいと思います。先週は8人の方にお1人5分ということでお願いいたしました。5×8=40で、40分で終わるはずでしたが、実際にはほぼその倍近く掛かりました。今週も一応5分という原則は貫きたいと思いますが、先週、事実上、平均10分近くお話があったということは事実として踏まえた上で、御発言いただきたいと思っています。

そして、その後の残りの時間でございますが、特に今後の段取りということで、この種の会議、まだまだ話が足りないので、もう一、二回、更にもっと回数を重ねた方がいいのか、それとも、もうトークは十分だから早くアクションに移れということで、特に文化庁として大臣の御指導の下に、どこに重点を置くか、どういう段取りで進むか、すぐ、とにかくまずアクションを始めてもらって、場合によっては1年後にこのメンバーで集まっていただいてレビューをすとか、そういう方がいいのか。そういったことも含めて、後半の自由討議のところでは、今後の方向性とか重点について御発言を頂ければと思います。

では、最初に4人の方々から、5分をめぐり10分以内でお話を頂ければと思います。4人の先生方、挙手いただいても結構ですし、私の方から指名をさせていただいてもよろしいですが、いかがでございましょうか、トップバッター、どなたでも。

宮田先生、どうぞ。

【宮田委員】 目が合ったので。ありがとうございます、お時間を頂戴いたします。先ほどの下村文科大臣の大変力強いお言葉、まさしくそのとおりでなという気がしています。スタートラインは切れたのかなと思います。

最低3つを御提言させていただきたいと思います。まず国家予算。この中で文化庁の予算を使うのではなくて、全部の予算の中から1%使えば、全く回りには迷惑を掛けずに文化がとれるという1%フォーアーツ法案を提案したい。これは、公共事業の1%は、必ず文化芸術のために役に立てるというもので、こういうふうにすれば新しい予算を出すわけではないので財務省は怒りません。

例えば、かつて小学校が全部木でできていた時代、それぞれのまちの棟梁（とうりょう）が、隣のまちとは絶対違うという意気込みで作ったから、小学校、中学校には、皆さんは、やはりあこがれを持ったし、卒業した後も来たいという気分になる。今、御覧いただけれ

ば、非常につまらない建物になっていますね。そこには愛も何もなくなっています。そうすると、教育の意味でも、非常に寂しい建物でしかない、夜露をしのぐだけのものという状態です。

まちの通りを見てもそうです。その通りの中に一つ一つちょっと 1%があれば、これは皆さん、とても考えます。隣のまちとは違う競い合いができる。ここにやはり文化ができる、美しさもできる。これはフランスもやっております。隣国でもやっております。

1 つの例ですが、建築家の隈さんは、フランスで建物のコンペで勝ったときに一番うれしいのは、その 1%があるからだと言われます。建物は、あれもこれもと要求されていく内に予算がどんどん削られていきます。最後のぎりぎりまで、その 1%で芸術を使うことによって、その建物に対しての感性が非常に高まっていくということを彼は実践でおっしゃっておりますので、これは、そういう意味ではいろいろなことで使えるのではないかという気がします。

2 点目、上野の山は、青柳先生も同じでございますが、ちょうど釈迦（しゃか）の手のひらと同じなんです。海拔 15 メーターの釈迦（しゃか）の手のひら。このすき間は不忍池、親指の向こうには東京大学。ここは非常にすばらしい空間なんです。今日あえてお配りはしませんが、上野は、ロンドンならばテート地区、フランスでいうならルーブルのあたり、そしてアメリカだったらナショナルモール、スミソニアンあたりのように、文化施設がきれいに集まっているところです。

ところが、上野は年間の来館者数が一番少ないんです。これだけすばらしいところがあるにもかかわらず、たった 1, 100 万人しか来ていない。スミソニアンは 2, 760 万人来ております。最低でも 2, 000 万人は来るべきところであると、それだけの集客力を持っているという気がします。そこには国立博物館もあり、科学博物館があり、西洋美術館があり、そして東京都美術館があるのです。

今、例えば都美館（東京都美術館）が新しく改築されました。東京芸大は、垣根を外せ、扉を開けということをお私はずっと提唱しているわけですが、お隣の都美館の改築で「アートの入り口」という新しいコンセプトを立てるという事で、連携事業として「とびらプロジェクト」と、コミュニケーターとして「とびラー」というのを作らせてもらいました。それで、実に面白く新しい人材を投入しているということによって、都美館の来館者数やボランティアの活躍が、がぜんすばらしくなっている、「とびラー」。

同時に、上野の地区をきれいにするためには、「あいうえの」というのをこれから作る

うと。愛，上野ですね，愛する。そういうふうになにかのキャッチ，旗があるということがすごく大きな合い言葉になっていくのではないかという気がします。

上野以外のところは，残念ながら教育機関がありません。東京芸大は教育機関としての125年の歴史の中では，文化財の保存に関して十数年という短い歴史しかないので，非常に実績が上がっております。日本の文化の残念なことは，発信はするけれども，アーカイブとして集積する部分が大変弱いことです。それと同時に，文化を集積するためにはクロッシング，違ったもの同士が重なることによって数倍の面白さが出てくるので，これをやりたいと考えています。そのために，芸術図書館を大学に造ろうとしていますが，決して大学だけのものではない。もっと日本全体のものとして考えています。

あらゆる国から来た人たちが，先ほど河村次長からも若いポップカルチャーというお話がありましたが，何のかんのといっても，どこへ行っていいか分からないと，みんな言うんです。それならば，上野へいらっしゃいと言いたい。そこにはいろいろなものがある。

例えば国立博物館の常設展はまさしく日本のすばらしさが蓄積されている。同時に，東京芸大にはファクトリーミュージアム的な意識が確実にありますので，これを利用するためにも芸術図書館というものは絶対造った方がいい。国立も都立も，上野にある芸術諸機関が，常に開かれた扉（とびラー）をもって一緒にやったらどうかと思います。

それから，先ほど次長が説明された方策，これをざっと見ていると，ただ横並びで書いてある。縦にぐさっと刺すという方法，重ね技が必要かと思います。第3の提言です。これは例えば文化芸術だけでは駄目なんです。例えば海外の富裕層を呼ぼうというのなら，まず人間ドック。まずは健康でないといけないので，医療機関と組んで高級な人間ドックに入ってください，体をきれいに健康にしてください。そして，その人間ドックが終わった後に，日本のすばらしい食材を食べていただく。そして，その後に，やっと，例えば新国立劇場でオペラを見る，歌舞伎座で歌舞伎を鑑賞する，あるいはまちへ出て行っているいろいろなことをするというふうに，重ね技をすることがとても刺激的だと思うんです。

最後は，日本のすばらしい豪華客船に家電をいっぱい積んで帰る。そうすれば，大臣の言われたカジノもその中に入るかもしれないというふうに形を持って行って，輸送代も要らない，そのまま持ってうちへ帰れるというふうな路線を作る。重ね技の文化芸術論，これも必要なことだと思います。

実はちょうど今，国公立の芸術系5大学が集まり，シンポジウムを含め，スポーツや芸術の交歓祭である五芸祭をしていて，これはもう59年も続けています。東京，愛知，京都，

金沢、沖縄と、今後もまた増えていくだろうと思います。五芸大の学長さんたちと、お互いが共に感覚を共有しながら新しいものを求めていくという気持ちを持って、いろいろな切り口を重ね合わせてやっていこう、発信していこうと話をして、きょうここに来ました。

それから、大臣、できればオリンピックについて、スポーツだけではなくて、文化もと言われていますが、そうではなくて、クーベルタンはスポーツ・文化芸術・教育と、今の言葉でいうと3本の矢と言っておりますので、決してスポーツに特化したというふうには言われない方がよろしいかと思えます。そのようなことを感じました。

ついでになりますが、きょうの夜は隅田川に東京ホテルを流します。私、実行委員長を務めさせていただいているんですが、川を、水を治めない人は文化に残れない、歴史に残れないという気がいたしております。川を見るときに、例えば隅田川は花火だけではなくて、本当に水面にいかにも自分の目線を下げることによって美しさが分かるということがあります。この東京ホテルは、東京都とパナソニックさん、あと数社の御協力を得て、非常に面白い環境ができました。昨年からやっておりますが、これは東京オリンピック招致のためのイベントということで、文化のにぎわいという意味で仕事をさせてもらっています。

最後になりますが、いろいろなジャンルからの重ね技をしていくことによって、技は決まると思えます。きょうの夜には、多分稀勢の里が勝つでしょう。栃東以来、優勝旗の写真が飾られるのではないかと期待しております。横綱審議員もやっておりますので、そんなことを感じております。

4つでございます。済みません、7分になりましたが、これにて終わりにします。

**【近藤文化庁長官】** ありがとうございます。重ね技というのは、最も私どもの不得意とするところでございます。すばらしい御指摘を頂きました。

では、お次はいかがいたしましょうか。黛さん、よろしいですか。

**【黛委員】** 俳句をやっております黛です。宮田先生の後で、いささか話しにくいなと思っているんですけども、宮田先生がこんなにキャッチコピーがお上手だとは夢にも思わず、私の本業を奪われそうな感じです。

今回この資料を拝見しまして、この文化芸術立国計画、本当にすばらしいものだと思います。2020年にこれが達成されたイメージを読みまして、本当にこのイメージどおりになっていたら、すばらしいと思います。ただ、これを実現しようと思ったときに、私はここに書かれていない大事なことが1つあると思うんです。

それは、ここで言う文化とは一体何かということです。芸術、芸能、伝統工芸——コン

テンポラリーも含めてですけれども、そういったものが書かれていますけれども、以前、近藤長官と対談をさせていただいたときにもお話をしましたけれども、これらのものが連続と続いてきた背景にあるものというのは生活文化だと思うんです。それは言葉であるとか、道徳であるとか、食であるとか、季節感であるとか、礼儀作法であるとか、そういった日常の本当に日々の暮らしの中で培われるものだと思うんです。生活の知恵というのがまず文化の基層にあって、その基層の上に今の芸術というのがつながっていると思うんです。

例えば1つ例にとれば、漆というすばらしい芸術がありますけれども、そもそもは恐らく古代人が水をすくうのに器というものを発見したと。あるいは、何か食べ物を盛るのに器を発見した。その器を使うのに、漆を塗ったら腐食が防げるということに気づいた。最初はそれだけのものだったのに、それに螺鈿（らでん）や、金など、装飾を施したりするうちに、だんだんそれが美しくなっていた。美を見いだしていった。それが今のすばらしい漆の芸術になるわけですね。

そういった一番基の日々の生活にあるもの、生活文化が現代社会においてないがしろになっている。この計画の中にもある程度それは書かれてはいますが、これは芸術教育というか、情操教育の一部だと思うんです。もっともっと根っこにあることが、私は大事ではないかと思います。そのベースの部分がやせていくと、その上に成り立っている、今私たちが持っているすばらしい日本の文化芸術もやがてはやせていってしまうのではないかという危機感を持っています。

二、三年前にドナルド・キーンさんと対談をしたときに、私は非常にショックを受けました。そのときにキーンさんがおっしゃったのが、キーンさんは大変な知日派で、親日派でいらっしゃいますけれども、70年間日本を見続けてきて、私は最近の日本人に大変失望しかけていますとおっしゃいました。最近の日本人というのは、特に都会に住む若い人のことなんですけれども。

理由を伺いましたら、3つおっしゃいました。1つは、日本語が乱れてきている。それから、もう一つは、日々の暮らしの中に季節感がなくなっている。そして3つ目に、新しい物への好奇心がなくなっていて、そして物事を客観化してユーモアに変える力がなくなっている。この3つというのは日本人の非常に大きな魅力だったと。これが、ついこの間の、つい前の世代の人たちにはあったのに、今の若い人たちにはなくなっている。この3つの要素は、日本の芸術文化の、いろいろなところに現れていると思うんです。

季節感だとか、ユーモアだとか、それから、もちろん美しい日本語だとか、全てそうですね。そういうものがどんどん日々の暮らしの中になくなってきている。

この三角形のピラミッドの一番下にある基層の部分（生活文化）がなくなっているということは、今私たちの持っている世界に誇れる芸術文化というのも、やがてはやせていってしまうのではないかなという危ぐ感を私は持っています。

それから、もう一つ、これは文化庁の話ではないんですけども、たしか経産省でしたっけ、クールジャパンの……。

**【下村文部科学大臣】** 内閣府で、秋元さんはそのメンバーでやっていらっしゃって。

**【黛委員】** やっていらっしゃいましたね。クールジャパン。それはもちろんいいんです。たくさんイベントをやっていたと思うんですけども、そのクールジャパンでばくだいなお金を使ってやっていたことが、真のクールジャパンの担い手、例えば地方の職人さんとか、そういう人たちにその恩恵が届いているかという、それはなかなか難しいと思うんですね。

私は10年程前から近藤長官や、エバレットさんにもお願いして、「日本再発見塾」というのをやっていて、地方の文化の掘り起こしをしています。彼らは正にクールジャパン、ある一部分の重要な担い手であるわけですけども、そういう方たちに実際お話を聞いたときに、そのクールジャパンの恩恵を受けていないと。それが自分たちに何の影響もない。実際に彼らから聞こえてくるのは悲鳴だけなんです。

その部分も、この文化庁の計画の中に組み込んでいかななくてはいけないと思っています。もちろん、秋元さんがやっていらっしゃるような華やかな部分、も必要ですけども、文化というのは一過性のイベントでない部分があるわけですね。一朝一夕ではできない、小さな小さな積み重ねで成り立っていく部分があるわけです。だからこそ、今その上に今のフェスティバルとかイベントが成立するわけです。今私たちは先人たちが積み重ねてきたものの上で文化の消費をしているんですね。

ですから、消費だけではなくて、引継ぎをしていかないと。そして、これから更に育んでいくということも同時に意識的にしていかないと、どんどん文明や科学技術に押されて日々の文化の力や叡智（えいち）が、今の日本というのはなくなっているような、私は、それはものすごい危機感を持っています。以上です。

**【近藤文化庁長官】** ありがとうございます。日本の文化芸術は実用的な毎日の生活の道具とか、そういうところから生まれてきていると私も前から思っていました。そこ

は、ヨーロッパはどちらかというと、道具と芸術は切り分けますけれども、日本は日々の生活の道具の中に、そこに美を見つけ、それから発達してきて芸術ができたという感じを持っております。正に黛さんのおっしゃったこと、大変深く受けとめております。

キャッチコピーがないとおっしゃいましたけれども、文明よりも文化とか、生活に根差したとか、いい言葉があったと思います。

それでは、どちらにいたしましょうか。秋元さん、どうぞ。

【秋元委員】　まず、クールジャパンに関しては、今肅々とクールジャパンのメンバー全員でやっています、決して表層的な部分だけをやっているのではなくて、本当に一人一人のたくみの力というものが浸透するように今やっています。ただ、それが、時間が掛かっていることは事実だと思います。それを一言申し上げたい。クールジャパンはクールジャパンなりに全力でやっているということです。

そして、今回のこの文化芸術立国に関して、ずっと皆さんのお話を伺っていて本当に参考にもなりますし、うなづくことばかりなんですけど、一番難しいなと思うのは、皆さんというか、ここのレジュメも含めて頭が良すぎるなど。つまり、例えば何かメディアで出たときに、いつも行っている定食屋のおばちゃんに「いや、今度芸術立国やるんだって」とは言っただけないなど。そこが問題だと思うんです。あるいは、若者に「芸術立国、何か面白そうですね、文化庁の」というふうに言ってもらえない。

結局は芸術を心配し、憂う人たちが集まってやっているにすぎなくなるんじゃないかと、そこを僕は一番心配しているんですね。つまり、文化とは、僕も勉強不足で分かりませんが、文化とは初めからこんなに高尚で、みんなで考えて、伝統なりを守ろうとしたものだろうかと。多分そうじゃなくて、生活の中に、普通に生活しているうちに残っていく結果だと思うんです。だから、それをいつの間にか結果とか川の流れを我々が何か自然の力ではなく、こうなんだという誤ったことで導いてしまう可能性があるなど。もっと大胆に何かをする方法はないだろうかということを考えているんですね。

それは教育もそうで、教育も余りにも過保護で、もうちょっとこうやらないと日本は教育、負けるぞというよりも、一番は選択肢。多分みなさんもそうだと思うんですけども、僕は、夢とか将来、そういうものというのは半径5メートル以内で決まっているんじゃないかと思うんです。その半径5メートル以内というのは、自分の例えば近所先輩とか、お兄ちゃんにギターのうまい人がいたと。そのギターのお兄ちゃんがうまいんで、ギターを教えてもらっているうちに音楽の道に進もうと思ったとか。バイト先の先輩から「ちょっ

とおまえ、建築現場に一緒に来てくれ」と言われて、行っているうちに建築に興味を持ったとか。

すごく小さいところで何か天職となるようなものを得ていったと、それと文化というのは何か近いのではないかと。つまり文化の選択肢が今ない、文化に触れる機会がないから、僕はクールジャパンでも、いろいろな雑誌の取材でも、いろいろなところで文化というのは面白いなと話しています。僕のように文化的ではない人間がいろいろな文化財がある場所に行ってお話を伺ったりすると、すごく面白い。絵でも、美術館に行くと、すごく面白い。でも、みんなこのきっかけがないんだと思うんです。

つまり、このきっかけを作るにはどうしたらいいか。子供たちに我々が教育をする中で、このきっかけ作りをどれだけしてあげるかだと思うんです。でも、今残念ながら、この文化芸術立国のレジュメを見ても、ニンジンの栄養素が書かれているような気がするんです。子供たちに、このニンジンはこんなに栄養があるんだから食べなさいと言っても、食べない。やっぱりニンジンをすりおろして、リンゴジュースに混ぜて飲んでもらっているうちに、ニンジン、いいでしょう、おいしいでしょうと。あるいは、ニンジン・リンゴジュースが飲めたんだから、今度はリンゴの量をちょっと減らしてニンジンだけで飲んでごらんとか、あるいはニンジンをぽりぽり食べてごらんというような文化の接し方をしていかなないと、何かすごく高尚な家庭で、あるいはお父さん、お母さんが文化に造詣（ぞうけい）が深く、そういう人たちはどんどん文化に興味を持つ。でも、一般の、もしかしたら、こういう言い方をしたら失礼だけれども、コンビニの前に座って時間を潰している子たちには、どここの美術館のあれを見てこいと言う人がいない限り、なかなか難しいと思うんですね。

これは雑談なんですけれども、僕は格闘技というのは余りよく知らないんです。あるとき古舘伊知郎さんに、きょうの高田延彦とヒクソン・グレイシーの試合を見た方がいいと言われたんです。異種格闘技ですね、ヒクソン・グレイシーというグレイシー柔術とプロレスの高田さんの。それで、何ですかと言ったら、ヒクソン・グレイシーのお父さんというのが、昔プロレスで木村雅彦という人に負けたんだと。そのときにひじ十字をやられて、ひじ十字でタップしないで、ギブアップしなかったんで折られたと。その思いがあるから、その息子は絶対に日本のレスラー、格闘家をひじ十字で決めるというふうに言われたんです。

そう言われると、ものの見方というか、プロレスの見方、格闘技の見方が面白くて、結



果どうなったかという、最後ヒクソン・グレーシーが高田をひじ十字で決めて、古舘さんの美学でいうと、これは折られなきゃいけないんですけども、タップしちゃうんです。それはタップします、痛いから。だけれども、そういうものの見方というのがあると。

例えば僕は全く絵画とか分からないんですけども、絵というのは、例えばピカソだの、いろいろな人がいるけれども、誰が天才なんですかと言ったら、ある人がルノアールだと言うんです。ルノアールはなぜ強いかと。あの戦争時代にみんなが影響を受けている中、ルノアールだけが少女を描いたり、淡々としていたと。あれこそ逆に狂気なんじゃないか、あるいは、あれこそ平和なんじゃないか、あれこそ愛なんじゃないかと話してくれた。それは正しいか分からないですよ。専門家の皆さんがいらっしやる中で恥ずかしいですけども、僕のような素人にとってはすごく興味深く、もっと知りたいな、もっと絵の世界に入りたくなと入っていったんですね。

そういうようなことが、この芸術立国の中にもっと必要なんじゃないかなと思います。だから、前に宮田学長ともお話ししたんですけども、みんな絵のコンテストと言ったら、絵のうまい人が応募するじゃないですか。絵の下手なコンクールというのを、日本一絵が下手なやつは誰だろうというコンクールをやろうじゃないかと。それを本当に専門家の皆さんが、こいつは下手だと。そうすると、何で下手かとか、下手とうまい、いい芸術と悪い芸術、そんなものはないんですけどもということで芸術論になるんじゃないかと。

絵がうまいコンクールだったら誰でも応募できないですね。「お父さん、お父さん、やろうよ」と言ったら、「おれは絵が下手だ」と。「下手だったら、誰でも参加できるんですよ」というようなやり取りになって、それがどこかでその展覧会をやるのか、そういうところから少しずつ興味を持ってもらって、面白いな、絵って、面白いな、文化ってとか。

だから、例えばいろいろな歴史的な文化財も、単純に普通の人々が修学旅行とか何かで行って説明されても、ポカンだけれども、じゃ、もうちょっと面白い説明があるんじゃないかとか、あるいは物の見方とか。僕は、九州の嘉穂劇場に行ったときに——大衆の演芸場ですね、あそこに十二月二五日という札が逆さに貼ってあったんです。「何なんですか？」と聞いたら、これは石川五右衛門の命日にちなみ、それを逆さに貼ることによって、盗みに入らないでくださいという、鳥居の立ち小便禁止みたいなものです。

というようなことが、あちこちの文化財も、文化にはいろいろなこと……、つまり、文化というのは、この歴史の中で人間の知恵とか、思いとか、いろいろなものが詰まって自然淘汰（とうた）されて残ってきたものなので、それをもうちょっと面白くできないかな

と。ですから、この文化芸術立国の最大のテーマ、今年はいろいろなことがあると思います。でも、最大のテーマは何にしますかと。今年はとにかく日本中の家で絵を飾ろうとか。絵を飾るといことがどれだけ心にゆとりができて楽しいものなのか。次はこういう絵がいいねとか。子供部屋にはこの絵とか、全然高くない、フリーマーケットで売っている絵でもいい、自分で描いてもいい。とにかくそれをまず今年目標にして、絵を飾ろうということをやろうとか、その中で具体的にみんながほっとするような、この絵、いいねということから、少しずつこの大きな目標に向かって行かないと、やっぱり全然関係のない人たちにとっては、敷居が高過ぎて駄目なんじゃないかと。

今の子たちは、どちらかという社長にもなりたくない、車も欲しくない、海外にも行かない。彼らは今、生活でいえばサプリメントで生活するようなイメージです。これで別に何も不自由ない。でも、世の中にはこんなおいしいものがあって、僕のようにこんなカロリーが高いけれども、おいしいなというものを食べるとか。そういうことで成り立っているのが、すごく数字的で植物性の人間、そんな日本人が増えてしまっているの、何かここで、いや、面白いとか、感動したとか、楽しいとかということ、どこまで僕にできるか分かりませんが、僕はこれを何とか、もうちょっとみんなが楽しくできるようにしたいと思います。以上です。

【黛委員】 ちょっといいですか、秋元さんに。

【近藤文化庁長官】 どうぞ。

【黛委員】 文化に触れる機会がないというのは、本当に私も同感なんですけれども、私が言っているのはもっとその手前の話で、家庭の中で文化に触れていないんですよ。つい先日聞いた話で、京都の和菓子屋さんがある高校に和菓子のワークショップに行ったら、高校生で和菓子を今までに一度も食べたことがない子が20%いたそうなんです。和菓子というのは、日本の文化の総合芸術みたいなものですね。

あれはただのスイーツじゃないです。

【秋元委員】 それは分かりますけれども、それをどうやって食べるようにするかということでしょう。

【黛委員】 それは家庭の中でやることではないでしょうか。

【秋元委員】 ですから、その家庭の中で、それじゃ、どうやって食べさせると思うのですか。

【黛委員】 それはお父さん、お母さんの問題ですよ。

【秋元委員】 お父さん、お母さんは、そんなこと一々言わないですよ。そうじゃなくて、さっき言ったように、例えば絵を飾ろうとかいう中に、例えば和菓子の、この間、稲田大臣があめ細工をもらったんですと言って、うれしそうにあめ細工を持ってきた。あめ細工を見た瞬間に、みんな、ああ、あめ細工っていいよねと広がった。つまり、何もなくて、お父さん、お母さん、和菓子を食べましょうということを言っても、なかなか難しい。和菓子を食べようと思うというふうにするためにどうするかなんですよね。

例えば今はお魚だって、切り身で売っているわけだから、本当のお魚が分かっていなかったり。けれど、かぶと煮なら、かぶとを煮るとここの頬（ほほ）がおいしいんだよねとか、タイの骨にはタイの形が出てくるんだよねとかの会話になったり。これが文化だと思うんだけど、それをさせるためにはどうしたらいいかということ、ただこのレジューメなり何かに、みんな和菓子を食べましょう、みんなお魚を食べましょうと言ってもやらないから、そこにどういう知恵を、そこにどういうプロデューサーを置いて、どういふふうに広げていくかということ、もっとみんなで考えた方がいいと思うんですね。

【黛委員】 そうなんです。それを、だから、もっと家庭の中で実行してゆく。例えば季節の花を飾るとかね。今ならドクダミの花だっていいですよ。季節の花を一輪飾るとか、草花でいいんです。

【秋元委員】 それがなかなかできない。それをなぜできないかという、それをみんなで考えるでしょう。そうすると、出てくるアイデアは大抵想像つくのは、何月何日は和菓子の日とか。そうでしょう。

【黛委員】 そうなの。それでは駄目なんです。イベントではなく習慣にしないと。あとは、挨拶の仕方とか、日本人独特の、相手が座っていたら、自分も座って挨拶とか。

【秋元委員】 だから、それは多分、つまり粋（いき）という言葉をもっと教育できるかだと思います。名古屋にあるスイーツ屋さんがあるんです。そこにお取り寄せするでしょう。そうすると一輪の花が入っているんですよ。この一輪の花がしおれるまでが賞味期限ですと。

【黛委員】 ああ、それ、すてきですね。

【秋元委員】 ねえ、これ、粋でしょう。

【黛委員】 うん。

【秋元委員】 これが多分日本人の文化だと思うんです。

【黛委員】 だから、そういう仕掛けが必要でしょう。

【秋元委員】 それを、そういう仕掛けをして、家でこれっていいよねという会話があれば、絶対文化度は上がっていくんですよ。でも、多分そのときに、それも気づかないまま捨ててババロアだけ食べていると、広がらないよね。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。議論は尽きないと思いますけれども、黛さんがおっしゃることも、秋元さんがおっしゃることも、我々役人がともすれば頭でっかちで考えがちなことを大きく超えた発想の転換を迫るすばらしい御提案だと思いますし、こういったものはもっとこの下村プランにもしっかりと盛り込みたいと思います。どう実現するか、手法につきましては、具体的なことは後ほどまだ必要があれば、御議論いただきたいと思います。

とりあえず、青柳先生、最後になりましたが、御発言をお願いします。

【青柳委員】 卑近な例というか、決してこれは自慢話ではなくて、先週まで私はマインツに行っていて、国際学士院連合という世界 62 か国で 80 か所ぐらいの学士院、アカデミーの集まりの会議に出ていました。たまたま副会長、会長の選挙があつて、私も副会長にノミネートされていました。そういう選挙のときは、国際学士院連合、これは文科系ですけれども、英語とフランス語、両方でスピーチをしなくてはなりません。ほとんどの人がバイリンガルで、完全にフランス人でも英語は母国語としてしゃべれると。

4 人の副会長候補が、スペイン人と、フランス人と、リトアニア人と、私です。私は、フランス語は正に幼稚園生のフランス語です。それから、英語のレベルは小学生ぐらいです。それで 5 分ぐらいしゃべるわけです。ですから、間違いもあるし、失笑も買いましたけれども、結局私が圧倒的にトップ当選です。それはなぜかという、さっき下村大臣がおっしゃったように、やっぱりアイデンティティーなんです。私のアイデンティティーというのは、学者として、それから日本人としてのアイデンティティーです。それで十分に国際社会で通用するんです。グローバル人材だと思います。

そういう意味で、私たちのアイデンティティーというのをどれだけきちっと認識しているかということが、やっぱり文化の理解の中に一番重要な役割を果たすのではないかと。我々の住んでいる日本というのは、人口 1 億 2, 000 万ですから、先進国としては人口の非常に大きなところなんです。それから、国土は六十何番目ですけども、海域をあれすると世界で 6 番目なんです。しかも、この国土の中の 68%——これは国連の統計ですけども、が緑で覆われているところというのは、先進国の中でスウェーデンと日本ぐらいなんです。ドイツが三十数%です。

ですから、いかに今の国際社会のエコロジカルなことを重要視する中で、大きな位置と  
いうか、高い位置を占めているか。それを総合すると、そして、南北の長さが3,000キロ  
にも及ぶわけですから、実は大変な存在感のある国なんです。私たち、小学生、中学生の  
ころ小さい国、小さい国と言われていましたが、実は自分たちのことを等身大の姿で捉え  
ていないんですね。それだけの大きさを持っていることを私たち自身が意識して、そして、  
自分たちの国の中の文化を考えるとということが、まず大切なのではないかと。

秋元さんも、あるいは黛さんも今おっしゃっていましたが、文化というのはいろいろな  
捉え方があるんですが、1つには、空気みたいなもので、自国文化というものを余り意識  
して、自国文化がこうだから、こういうふうには食事はするんだとかいうことは全然、意識  
していれば生活できないわけです。それが自然に身についているからこそ文化なんだけれ  
ども、だけれども、だからこそ、逆に、その無意識下の中にある私たちの文化自体をもう  
少し意識化することで、我々日本国民全員が日本文化をよりコンシャスネスを持つと。ボ  
ディコンシャスではなくて、カルチャーコンシャスになるようにしていくことが非常に大  
切なのではないかと。

そのためには、やっぱりいろいろな意味でお料理をする、食べやすくするということが  
そうでしょうし、いろいろな形での波状攻撃をどんどんやっていく。その1つの大きな例  
が、例えば明治以降、かつての文部省が大変成功した例が、日本人の音階感覚を完全に西  
洋音階に変えたんですね。これは小学校唱歌とか何とかをぼんぼんやったわけで、これだ  
け自国にある音階の感覚を変えた国というのはほかにはないと思います。これほど西洋音楽  
を理解している国も少ない。これは、様々な波状攻撃の中で構造的にある文化の部分を変  
えていったということが、くしくも既にあるわけです。

そういうことを考えながら、構造的ないろいろな戦略、あるいは重ね技を重ねて、そし  
て、我々の文化というものがいかにこれから大切なのかということ意識していくことが  
重要であると。今なぜ文化なのかということ、これは政治家でいらっしゃる大臣が非常  
に感覚的に鋭くとらえられているので正にそうだと思うんですが、私ども、様々な資源や  
資産を持っておりますけれども、文化というものがまだ十分に資源化されていないんです。  
でも、それだけの活用の、利用の、あるいは将来の日本の活力を増すための材料として使  
える部分がたくさんある。だからこそ、今これから文化立国、あるいは文化芸術立国をし  
ていこうということ。

ちょうど人材という言葉がありますけれども、人材というのはその人の実力に十分合っ

ていない段階にある人のことを人材と言うわけです。だから、例えば日本は完全な男社会ですから、男の中にはほとんど人材はいません。だけれども、女性の方々は男性に比べて恵まれていないので、自分の実力を十分に発揮できない人がたくさんいるので、女性の中には人材の宝がたくさんあります。

それと同じように、今日本社会が持っている様々な資源の中で、文化というのがこれから資源化できる、活用できる最大のとおきのものであるからこそ、これから活用せざるを得なくなっていくのではないかと。そのときに、そのことを十分にやっていいのではないかということを考える意味で、2つの統計があります。

1つは、ダスグプタという、ケンブリッジ大学の今名誉教授になりましたが、世界で一番信用されている経済学者が中心になって、去年のリオ20で「Inclusive Wealth Report 2012」というのを出しました。これは世界の豊さというものを……。GDPというのは単なる四半期ごとの会社の売上高だけだから、本当の豊さというものは何なのかということをやってみようことで出したレポートです。

その中で、1位がもちろんアメリカで111兆ドルです。2位が56兆ドルの日本です。それでずっと下がって、2008年の統計ですが、中国が26兆ドルか何かです。ところが、これが人口比で割ると、実は日本がトップになるんです。だから、日本が1人当たりの豊さというのは世界で一番。だけれども、この豊かさとは何かというと、ヒューマンキャピタルと、フィジカルキャピタルと、ナチュラルキャピタル、ネイチャーキャピタル、つまり自然の資源などに分けている。

日本は圧倒的にヒューマンキャピタル。つまり教育をどれだけ受けているか、あるいは職業スキル、どれだけ身に付けているかということで、約75%がヒューマンキャピタルなんです。それで、自然資源なんていうのが本当に少ない。フィジカルキャピタルは公共施設とか、インフラも入りますから、ある程度、20%ぐらいある。それを見ると、やっぱり日本の豊さというのは教育とか、あるいはそれぞれが持っている文化的な充実さとか、そういうところに非常に大きく左右されているのが1つ。

それから、もう一つは、BBCが毎年やっているんですけども、国際社会の中でほかの国にいい影響を与えた国ということで統計をやっていますが、これも大体日本とカナダがいつも1位か2位です。かわりばんこに1位になっている。それほど世界からは信用されているというか、ある意味で愛されている国である。そういう自分自身の姿を、まずきちんと見分けることである。

ところが、これはレヴィ・ストロースという文化人類学者が書いていることですが、世界の社会というのは、冷たい社会と熱い社会、2つに分かれると。熱い社会というのは、ヨーロッパ、アメリカのように競争社会で、わざと社会階級などを作って競争させることによって、それを社会のエネルギーにしていく国。ところが、日本のようなところは、ストレスをお祭りなどで発散させていくという冷たい社会という言葉を使っています。つまり、さっきもちょっと話題になりましたが、ハレとケというようなものを使い分けることによって、社会的な持続性を保っていくというところであると。

もうかなり前になりますが、新潟地震のときに山間部で大変被害を受けたところを、我々東京にいるような人間が見ていると、どうしてあんなに入会地があつて、杉の木やヒノキで囲まれている中で、あの入会地から少しぐらい自分たちで木を切り出して、自助努力で復興に役立てないのかというふうに思ったりする。これは、我々の社会というのが循環文化だからです。西洋のようないわゆる蓄積文化ではないから。

ところが、山間部の人たちは、自分たちの家というのは、もう建材などは全部工場生産で作られたものを山間部に持ってきて造っているんだから、なぜ都会の人、非り災者は自分たちに冷たいのだろうかというふうに思う。つまり、日本社会の中で、公団住宅などが出来始めたところから、徐々に徐々に西洋型の蓄積社会、蓄積文化が入り出してきている。その一方で、いろいろなところに伝統的な循環文化が残っている。この2つがどこかでそこがあるので、それが日本社会の不機嫌さの大きな理由だと思うんです。

ですから、何とかしてこの日本の社会にある伝統的な循環文化と、それから戦後特に日本に入ってきている欧米型の蓄積文化というものを合体して、より活力のある文化を、あるいは大きな文化をつくっていけないかということを考えています。

そのために、1つは、これは具体的な提案なんですけれども、国立デザイン工芸美術館というものを是非造っていただきたいと。この国立デザイン工芸美術館というのはなぜかというと、世界中に今デザイン美術館というのはたくさんあるんですが、欧米では、例えばイギリスの産業革命というのは1760年ぐらいから始まりましたけれども、日本は明治時代からですから1860年代になって初めて工業生産を始めます。ですから、全部を工業生産にすることができなくて、それまでの手工業をそのまま残したんです。つまり、ものづくり構造が工場生産と手工業という二段構えでの社会を形成していった。そのおかげで伝統工芸は残っているわけです。

ところが、欧米などは、特にアメリカ、イギリス、フランスなどは、残っていた手工業

をほとんど切り捨ててしまったので、本当の意味での伝統工芸というものがきちっと残っていない。だからこそ、日本の工芸が国際社会の中で今大変に価値のあるものとして認められている。そういうことがきちっと分かるようなところを作り、そして、そのネットワークを作り、そして、その後継者ができるようなシステムを作る。だから、ストックとしての美術館ではなくて、フローとしての美術館を、研究施設もあるような。

そして、最近10年間で特に企業の商品開発力が非常に落ちているんですけども、デザインというのは、それぞれのファッションにしても、グラフィックスにしても、プロダクツにしても、建築にしても、全部社会の在り方を考えながら製品開発をしている過程がずっと連続しているものなので、そういうものをインターンシップであるとか何かで経験することができるような美術館であれば、日本のものづくりというものをもう一度活性化することもできていくのではないかな。

そういうことと、最後に申し上げておきたいのは、重層的に重ねわざでやっていかなければならないからこそ、1つは、日本文化というものを、もう一つ、日本の中でも、それからいろいろなレベルで研究をしていくことが必要である。日本文化を研究する場合に、いわゆる「国風文化」として研究をする場合と、それから、それをなるべく相対化して、海外の文化と比較しながらする場合と、もう一つは、自国文化ではない人たちによって日本文化を研究してもらい、いわゆる異文化としての日本文化研究、こういうものを是非推進してほしい。

というのは、私は今から二十数年前、有馬先生が東大の総長だった最後のときに、私、広報委員長をやっていました。そのときに、いかに国立大学が貧しいかとかいうことで、老化と劣化と狭あい化と、これは僕が作った言葉ですが、それを有馬先生が、がんがん言ってくだったので、あるときタクシーに乗ったら、東大は狭いそうですね、古いそうですねという言葉聞いた。ああ、これで成功したと思ったんですけども、そのときに、今から二十四、五年前、もっと前、科学研究費がたしか500億行っていませんでした。

それが、今現在、おとしのあれでも2,630億ですから、下村大臣がおっしゃるように、我々、戦略があり、そして時宜を得ていれば、確かに予算が倍、2倍、あるいは科研費の5倍になる可能性がある。それを考えながら、今の皆様のおっしゃったような様々なことに対応していけばいいなという印象を持ちました。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。大変歴史的、あるいは文化人類学的な観点からの深い話だったと思います。



コラス、シャネル社長からのメモがございます。基本的にはドナルド・キーン先生がお持ちのようないら立ちといいでしょうか、日本人が日本人自身の文化のよさを分かっていない、だんだん無関心になっているという危機感が根底にあると思います。それから、具体的な方法として、もっと国際的なイベントをやり、政府が力を入れた方がいいとか、外国人の旅行者がもっと日本の良さを感じて発信してもらえるように、いろいろな工夫をした方がいいとか、いろいろな御意見がございます。具体的な阿波踊りをパリでやるというプロジェクト、多分コラスさん自身もかかわっておられると思いますが、そういう非常にスペシフィックな御議論もございます。

いずれにしても、先生方、繰り返しおっしゃったように、日本人自身が日本の文化のすばらしさに十分理解ができていない。それがだんだん子供たちに伝わりにくくなっていくという危機感を共有しておられるんだろうと思います。

それでは、残り 30 分程度で、今の 4 人の方も含めて、しかし、それ以外の 5 人の先生方、これまで是非言いたいけれども、どうしても言い忘れていた、あるいは、今日の 4 人の先生の話聞いて触発されて、一言言いたい、そういったこと、たくさんおありだと思いますが、30 分ほどという限られた時間でございますので、ごく手短かにコメントを頂きたいと思います。その際、もしできますれば、この会合、この議論をもう何回か続けて議論を深めた方がいいのか、とりあえずここで一度打ち切って、来年度の予算要求も含めて、具体的なアクションというものを私どもにお任せを頂いて、それを後ほどウオッチするというか、フォローアップ、モニターするというか、そういう方がいいのか。もし、できますれば、きょうの会合が終わった後の方向性について、先生方の御意見、サジェスションを頂ければと思います。

それでは、フロアをオープンにいたしますので、どなたでもどうぞ。

福先生。

**【福委員】** 青柳さんがおっしゃった、ストックとしての美術館ではなくて、フローとしての美術館という御意見に、なるほどと、私も思いました。ストックとしての美術館というのは、ある意味では「モノ中心」の美術館です。世界の美術館の歴史をみると「モノ中心」として始まったけれども、それ以降、フローとしての美術館、つまり人を巻き込むという美術館が中心になってきましたので、青柳さんの御意見に賛成したいと思います。

キュレーターとキーパーは違います。キーパーというのは、伝統的なヨーロッパの美術館の学芸員に対する言葉で、物をキープする人。一方、キュレーターの語源はケアとキュ

ア、つまり人を対象にした米語で学芸員を表す言葉です。日本の美術館も実は後者の方に移行してきていると思います。

私が教えています大学では、2年生と3年生が中心になって日本の美術館の現状を調査する授業を1年間掛けて行っており、それをまとめて『私たちが見た当世美術館事情』という報告書を毎年、学生が出版しています。基本的には日本の美術館150館にアンケートを出し、そこから回答を頂き、それを分析していきます。学生たちから出た疑問、例えば、「先生、美術館に行ったことはあるけれども、館長さんにお目にかかったことはありません。館長さんというのはどんな仕事をするんですか」というような、自分たちから出た疑問をベースに調査していきます。

あるとき、この美術館の調査をした学生が、「先生、美術館というのは何のためにあるの」と聞いてきましたので、「じゃ、それを調査したら」と言ったら、「設立趣旨を美術館に尋ねてみる」と言って150館にアンケートを送り、65館からお返事を頂きました。回答に書いてあった最悪のものは、「知事が言ったから」だったそうです。

大抵の設立主旨には「収集、保管、展示、調査研究」という言葉が用いられていました。これはもちろん、博物館法にのっとったものだと思うんですけども、こういった回答に対して学生は、「これは趣旨ではなく、活動内容で、しかも物中心の考え方だ」とコメントしています。

ところが、面白いことに2000年以降につくられた美術館、回答のあった65館のうち10館ですが、その10館は、1館だけを省いて以下の言葉を設立主旨に用いています。「多様な美術文化を再発見、再評価する」「様々な価値観」あるいは「人間にとっての意味と存在を問い直す」「人間の生き方、命」等です。この調査をした学生はこう言っています。

「美術館とは、人々が作品を通して様々な価値観を発見、見直し、人間の根源について考える場を提供するのだという“人中心”の考え方に、2000年以降変化してきているのが分かる」と。

ところが、一般の来館者はなかなかそんなふうに・・・美術館にきて、作品をみて、命かとか、再発見かというふうには余り思ってくれない。そこで、秋元さんがおっしゃった、プロデューサーとかファシリテーターとか、そのきっかけを与えたり、ちょっとついたりするような役割の人が必要になってくるかなと思います。つまり、来館者と人を結ぶプロです。

前回はファシリテーターの必要性というのをお話させていただきました。宮田さんが

都美館でとびラーを作ったとおっしゃっていましたね。とびラーを担当している何人かの都美館の人たちは、実は私たちが何人かトレーニングさせていただきました。その方たちが、とびラーにかかわっているボランティアの人たちをトレーニングされていると思います。現場で作品と来館者をつないでいる人は、そのほとんどがボランティアです。プロではないボランティアの人に任せているというのが現状です。ボランティアが駄目だと言っているのではないです。ボランティアはとても重要です。しかしボランティアの人たちは無償ですし、だからこそ専門性も要求されていない。その人たちに、こういう重要な仕事を任せているというのが今の日本の美術館の現状です。

美術館の館長は月に数日しか来ない人もいます。先ほどお話ししました美術館調査で一人の学生が、「館長さんは月に何回来ますか」という質問をして分かりました。ところが、こういう館長でも無償ではありません。そんな館長さんこそ、名誉あるボランティアにして、そのかわりに、人と作品をつなぐ人たちへの予算をきちんと確保していただきたいと思います。

別の学生が行った美術館における教育普及の調査には、49館から返事がありました。そのうちの19館が教育普及専任スタッフはいないと回答しています。各美術館の総予算に対しての教育普及予算率も尋ねています。平均2%です。最も低い館は0.02%でした。青柳さん、この0.02%って、お幾らだと思われませんか。

【青柳委員】 コメントを控えさせていただきます。

【福委員】 8,500円です。これが現状です。ちなみに、ニューヨーク近代美術館の年間教育普及予算は5億円です。

学芸員と美術史の研究者の仕事は、ほとんどの部分は同じだと思うんですけども、最後だけ違います。研究者が、自分の研究を発表する相手は同僚の研究者です。学芸員はもっと一般の人を対象にしています。ですから、秋元さんがおっしゃっているようなマネジメント力とか、企画力とか、ファシリテーター力を持った学芸員を養成しないと、研究者と同じように養成しては駄目だと思います。

学芸員資格取得科目の中にはもちろん博物館教育論というのはありますが、現実的にはほとんど機能していないようです。ですから、是非、一般の人たちを巻き込んでいける人を育てるための科目をきちんと入れていただきたいと思います。

成功例を1つだけ言わせていただきます。旭山動物園の入園者数は年間300万人以上です。世界で最も来館者の多い美術館、ルーブルは970万人で、メトロポリタンが600万人、

東京国立博物館は28位で150万人です。旭山動物園の300万人がいかにすごいかということがお分かりいただけると思います。

旭山動物園に関しては話題になっていて、テレビとかでも放映されていますので、御存じの方もたくさんいらっしゃると思いますが、来園者数がこれだけ増えたのは、決してユニークな展示をしたからだけではありません。旭山動物園はクリアなミッションステートメントを持っています。命を伝えるということです。命の大切さを伝えるために、旭山では、動物園で働いている人たち一人一人をファシリテーターとして何年間も掛けて育てました。だからこそ、こんな驚異的な数字になったわけです。ですから、単発的な企画、つまり「事業支援」だけでなく、人を育てるための「年間活動支援」にも、もっと予算を使っていたきたいと思います。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。できれば3分ぐらいをめどにお願いいたします。

一中さん、どうぞ。

【都委員】 先週もそうだったんですけども、エバレットさんはじめ外国の方が、王先生とか、呉先生とか、日本は世界のトップレベル、トップクラスの文化大国だと。外国人から見ればそう思うんですけども、何で今文化芸術立国を改めて提唱するのかという実感はどこにあるのか。これは、大臣の実感はどこにあるのか、お伺いしてみなければ分からないんですけども、何となく日本が文化国家ではないような気が、日本人がしている。

それは、どこにそういうのがあるのかなと思うときに、僕は、ホームグラウンドは国立劇場ですけども、国立劇場とか、新しい歌舞伎座に行ったときに、印象が日本は文化国家かいなど、本当に文化国家と言えるのかと思いました。それは、劇場は立派だし、中でやられている芸もそこそこ立派なんですけども、食堂に行ったり、売店に行ったり、ロビーの雰囲気とかがメトロポリタンや、そういうところと全然違うし、さすがに宮田先生の芸大美術館は、食堂はとて素晴らしいですね、国立劇場に比べれば。それ、長官にも前に申し上げたことがあるんです。

僕は、何となく日本人の一般の人たちが文化に対して怠慢なんじゃないかと、そういう風潮がある、それをみんな実感として感じるのではないかと。これは非常に無謀な発言なんですけども、僕がいつも思っていることは、憲法の改正です。憲法の中に文化をうたっているところがあるんですけども、25条が、全て国民は健康で文化的な最低限度の生

活を営む権利を有すると、これが僕は致命的だと思います。

僕の改正案は、全て国民は健康で文化的な最高限度の生活を希求する義務を有する。憲法は余り国民に義務を押し付けてはいけないんですけども、唯一の義務として、納税義務よりもっと先に——納税しなくてもいいです、する人がほかにいれば、でも、とにかく健康で文化的な最高限度の生活を希求する義務を有する。これは、幾らお金があつて、幾らぜいたくな生活をしていても、おいしいものばかり食べて女性とばかり遊んでいたら、これは非常に不健康で非文化的な生活ですから、そこを僕はちょっと訂正をしたいと思います。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。これは、96条を変えなくてもできますかね。

ほかの方、どうでしょうか。

【黛委員】 ちょっといいですか。

【近藤文化庁長官】 黛さん、その後、エバレットさん。

【黛委員】 今の都先生の発言に絡んで、さっき途中で終わってしまった話を補足したいんですけども。さっき、なぜ私が先ほどの話をしたかといいますと、要するに日常の中で私たちが日本人としての礼節とか、立ち居振る舞いとか、そういうものを生活の中で身に付けないと、それが最初に大臣がおっしゃっていた真の国際人として認められないのではないかとこのころに結びつくということが言いたかったのです。

青柳先生がおっしゃったように、英語、フランス語がそんなにできなくても、きちんと伝えるべきことがあれば、外国人は相手にしてくれます、もちろん流ちょうにできればもっといいんだと思うんですけども。最近聞いた話で、ワールドイングリッシュという言葉があるそうで、中国人の英語は実は大した英語じゃないと。ああ、ごめんなさい、王先生。先生はそうじゃないんですけども。でも、中国人は勢いで話す I come, you come at 7 で、7時に会おうと伝わるというんですね。極端な言い方をすれば語学力はそんなもんでもいいんですよって。それよりも、伝える内容が問題です。日本人としての自覚があり、日本文化を身に付けている。あるいは立ち居振る舞い。彼は、彼女は、きちんとした日本人だねという確固たるものを持っているということが真の国際人であるということだと思います。

今、都先生がおっしゃったように、本当に劇場も、箱もすばらしい、中身もすばらしい。でも、そこに集まっている人が質の低さが気になります。日本人の今のレベルは。私のあ

る外国人の友人が来たときに、なぜあの山手線を待つ軍隊のようにきれいに列を作って並ぶ日本人が、歌舞伎座の前で扉が開く瞬間に、人を押しのけて入っていくのだと。あの日本人の違いというのは、僕には理解できないと言いました。

要するに、日常でやはりきちっとしたことが身に付けられていないんです。個人個人の礼節、規範、美意識、そういうものを身に付けることが、ひいてはその総体が国の規範、国の美德、国の力になっていくということを、改めて申し上げたいと思います。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。

エバレット・ブラウンさん、どうぞ。

【エバレット委員】 もう、面白くて刺激的な話がいっぱいでも本当に勉強になります。頭の中を整理するのにちょっと苦労しているんですけども、3分間で。

まず、僕が見た今の日本の文化は、やっぱり土壌が腐っています。土壌はどこにあるというのは、一人一人が持っている丹田、ようするに腸です。丹田の感覚が鈍くなった。腸内に悪玉菌があり過ぎるんです。これは、象徴的な話し方ですが、さっきの秋元さんの話で、コンビニの前の子供たちをどういうふうに関心を持たせるか、そういうところじゃないと思います。どちらかというと、腸内に悪玉菌があるし、善玉菌もあるので、また、その中間の菌があるんです。善玉菌が多ければ多いほど、その中間あたりの菌が善玉菌の方向に行くんです。だから、福さんが言ったように、ファシリテーター、できる人たち、日本文化芸術に対する感性を持っている人たちが増えれば、日本の文化の美しさ、豊さが注目されるでしょうし、中間あたりの人たちの関心をつかんで、面白い文化芸術の方向へ行くでしょう。例えばフランスはそうやって実績を作っています。

また、この前にも言ったように、世界中の人たちはとても日本を尊敬しています。その意味では、もう既に日本は文化芸術立国になっているんです。ただ、その事実をいかしていない。欧米では、中国や韓国より日本こそがアジアの文化芸術立国という印象が強い。日本は2020年までに、欧米だけでなく世界の舞台上で文化芸術立国という座を獲得することも可能です。

もう一つ、日本の歴史を見るとなぜか天才というか、たぐいまれな才能を持った非常に魅力的な人物が多い。（例：空海、三浦梅園、南方熊草、芭蕉、宮沢賢治、白隠）ちゃんと調べていませんが、アジアの中でも日本人のノーベル賞受賞者は特に多いと思います。

**Cool Japan Science** という名前で宣言すれば良いかどうかは別として、海外の留学生を増やすために、歴史上の魅力的な日本人を取り上げた、面白いネット文庫サイトを多言語で

作ってみるのもよいかもしれません。

最後に、本当に面白い話がいっぱいあるけど、1つだけ、メタファーを残したいと思えます。縄文土器がありますね。どうしてあんなに美しい模様なのでしょう。宗教的な意味があるという説もありますが、こう考えてください。美しい陶器や道具があると、触りたくなる。それを使う仕事のやりがいが出てくる。美しい道具を使うと仕事が楽しくなる。また仕事をしているうちに、新しい発想がわきやすい。そして、良い仕事ができる。美しい道具があると、ほかの人とその美しさを共感できる。その共感から文化が誕生するし、絆（きずな）が深くなるし、共同体が発展する。美しい物に対する共感があれば、そのものの価値があがる。物の価値があがれば、経済が誕生する。そういう意味で、文化が経済の発展のために非常に重要です。

今の日本はどうでしょう。コスト削減や合理性重視やコンプライアンス社会の中で、美しい物や文化を本当に大事にしているのか。これが今とても重要なポイントです。理性ばかりでなく日本人が持つ素晴らしい感性を重視する事が大事でしょう。丹田、胃腸、一人一人の健康という土壌を作り直して、生活の中で美しいものが自然に生まれてくる環境を作る。僕が見た感じで、やっぱりファシリテーター、目利き、クリエイターなどの育成、また、行政、企業やメディアがそういう人たちに注目を当てればよい。

あとは、具体的な提案はいろいろあるので、それは後でメールで送ります。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。コラスさんも、ちょうど先週、一中さんが引用されたイザベラ・バードだと思えますけれども、日本が花であふれて、素晴らしい国だということを、1ページ目の一番下の行ですが、書いておられます。

それから、文化芸術の力、魅力を自然な形で国民に広く伝えるという役目のファシリテーターの重要性について、文化庁も今意識をしております。できることからやろうということで、この7月中旬にファシリテーターの重要性に関するシンポジウムを文化庁で開く予定でございます。これは音楽、美術、伝統芸能、全て含めて、どうやって文化の力を分かりやすく、かつ、子供たちの創造性を引き出すような形で伝えていくかということの、そういう志ある方々に集まっていただく会議を企画しておりますので、また御案内をいたします。

あと、最後に大臣からもお言葉を頂きたいので、今……。

では、王さん、どうぞ。

【王委員】 教育問題は今、特にアジア諸国で同じように注目をしております。問題多

発しています。日本が特に注目されている理由は、日本の失敗も、成功も、教育からその要因を考えられるからと思われているからだと思います。私自身が日本で30年以上も生活しておりました。日本の中でも、日本の外でも、どこへ行っても、あなたは日本人ですかと聞かれてしまいます。ということは、日本で受けた教育には、私は一生感謝申しますが、同時に、日本で受けた教育の中で、私が受けた中国の教育の中にある、特にモラル、しつけの部分と共通しているところが多くあると思います。これは、韓国でも同じことだと思います。

例えば、日本では、信濃夏期大学、ずっと長年続いてきた、戦時中もやめたことのない教職員研修の場がありまして、民間でやっておりました。このように、教育に尽力してきたことと、貢献されてきたことと、そこから得られた教訓ということをも生かしていくために、アジア共通の小・中・高、ないし大学の教職員の研修の場として、あるいはサマースクールとして開発して活用する必要があるかと思えます。

もう一つの提案ですが、中国から日本に渡った伎楽などのような伝統芸能、あるいは文化的なものですが、本国ではなくなりましたけれども、日本ではずっと保存され、そして上演されつつあります。先日、東京芸術大学にあります展示室へ行きました。伎楽の仮面を復元した展示がありました。このようなことを通して、更に文化財保存学というアカデミックの世界と重ね着をして、そして、教員の意識改革の重ね着として、更にアジアの相互理解と相互学習、相互発展という理念面での重ね着を全部かぶらせてしまっていて、アジア共通の何とかサマースクール、あるいは講座を、あるいはフォーラムを継続的に開催されていくことが必要ではないかと思えます。

この2つの提案と、前回私がこの会議に参加した提案と合わせて、本日配られた資料、11ページ下から3行目にあります、日本とアジア間で共通する文化を活用した交流を促進するものに関する提案でございます。以上です。

【近藤文化庁長官】      ありがとうございました。

藤島先生、どうぞ。遅くなりました。

【藤島委員】      前回の後、ある新聞に文化芸術の大国を目指すという報道を見てうれしく思いましたが、これからは文化発信をマスコミの皆様方にももっともっとお願いをして、本当に今、国民の中に文化力を浸透させていただきたいと思えます。それは我々の責任であると同時に、やはりマスコミの方たちとも一緒になって、日本の文化がどのようにこれから展開させるかを広く国民に知っていただかなければならないと思えます。



ですから、このような会を私は続けるかどうかというお話が先ほど長官からありましたけれども、是非とも、どういう形であるにしろ、マスコミの皆様方とともに、開かれた、そして面白く分かりやすい、そういったふうな会を続行していただければとお願いいたします。

そこで常々、私は考えていたのですが世界芸術家サミットとして世界中の芸術家の代表が日本に集まり「芸術力は今人々に対していかにあるべきか」と論じ合っていたら、その後、日本国中をまわって頂いて、海外の芸術家たちに日本のスケッチをしていただき、自国に帰ってから、御自分の国で日本の展覧会をしていただければ、観光立国としても大いにPRになるんじゃないかと、そんなことを思っております。

また、「文化オリンピック」ということもずっと前から考えておりました、スポーツ・オリンピックとともに文化オリンピック。技術力を競うのではなくて、妍（けん）を競うといえましょうか、そういったふうなすばらしい、ビエンナーレとも万博とも違う、何か新しい風を世界に送るような催しを文化オリンピックと銘打って、堂々と東京オリンピックと同時進行させてはいかがでしょうか。

次に、今、芸術院会員とか文化勲章という制度がありますけれども、なかなかこれが機能していないように思われます。こういった先生方の御功績、仕事ぶりをもっと世界にお伝えしたり、活かされたりすることはできないものでしょうか。それらは作家個人にほとんど任されているような気がいたしますので、お年を召して、本当にもう世界に向かっては動けなくなってから文化勲章というのもそれは御功績として当然であります、それとは別にして、時々はもっともっと国の力となるような、文化発信の力となるような、若い真の作家にも広げられないものか、そういうふうな方向に持っていけないものかなと思っております。

まだ、これに関してはいろいろ。芸術院会員というのは、元の帝室技芸員の続きがそういうふうになっているという大変古い伝統の上に立っていますので、ずっと皇室等とも深いかわりのある方たちなので、日本を代表してもっと海外でも活躍をしていただけるよう国が力を入れていただきたいのです。今日は、宮田先生も芸術院会員でありますので、大変失礼でございます、私のような者から。

もう一つ、先日も東博で大神社展を拝観しましたが、これは大変すばらしくて、今までにないような神道における総合的な展覧会でした。私も本当に感動して、よくこんなことが今までどうしてやられなかったんだろうと思うぐらいでした。私はこの展覧会

から日本の国が再び「国風文化」と一中先生がおっしゃったようなものが始まるのではないか。やはり、日本には花鳥風月、花鳥諷詠（かちょうふうえい）という、その根幹をなすそれらには、やっぱり一木一草に神が宿る。古神道、仏教という、神仏習合したそうだったふうなもののもつ深い審美感から始まっていることを教わったような気がしました。我々日本画の原点も、花鳥画は特にそうでございますけれども、その根元を見るような展覧会でした。また、上野の西洋美術館ではラファエロ展もやっていて、本当に上野はすばらしいと思いました。

そこに加えて、これらの新美感を蓄えた国宝が我が国には、たくさんありますので、日本国宝館と申しましょうか、本物も交えた精巧な技術のレプリカなんかで結構ですので、海外の方が来られたら気楽にルーブル美術館へ行かれるように、まず先に日本の技術、美術、そういうものを見ていただいてから、いろいろな会議に出ていただくというふうな、そういう流れを上野の森のどこかに日本国宝館としてゆくゆく建設をしていただきたいと思えます。

私のふるさとの徳島県に大塚美術館がルーブル美術館のレプリカをつくりました。私はある会合で申し上げたんですけれども、これをつくるならば、日本国国宝をその3倍の予算を掛けておつくりになったらいかがですかと。それで初めてバランスがとれると思えますが、西洋の方から見れば、また日本人は模倣してうまいなと言われなにかということも申したことがございます。その意味でも東博あたりが日本国宝館としてもっともっとPRをして頂き、人々が多く入場し、発展できないものか惜しい気がします。

上野というところは、美の聖地でございますので、先ほど宮田先生のお話も伺って、本当にそうだと思います。日本の文化力は、これからの世界にあって、一人日本の宝のみではなくて人類の宝として発信をしてゆきたいものでございます。そして国を教育するのは文化力しかないと思えますので、国家教育論としても大いに論じ合いながらこれから国内はもとより広く世界に発信できるようにと願っております。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。最後に副大臣、大臣から言葉を頂きますが、その前に、是非これだけは1分以内で言っておきたいということがあれば、どうぞ。

宮田先生。

【宮田委員】 まさしく今、先生方のお話を聞いていると、新しい文化の改革、ページが開かれたと思います。そうすると、青柳先生もおっしゃっていましたが、明治以降に文明開化があつてこそ、日本の現在があると。文明開化という言葉は、4文字でございませ

て、それを略語にしたのが文化なんです。ですから、文化といったことは、全て新しく開花したことであり、努力することであり、そして成熟させることなんです。

音楽の話を生先生はしてくれました。それから、先生は当然そのいろいろな意味で多くの大衆の風の話をしてくれました。同じように、この新しいものは文明開化なんですよということを言ってください。美術の方においては、廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）から、改めてまた日本のすばらしさを伝えることができましたから、明治以降、新しくなったときに、ここからまた文明開化、文化というものをつくっていきたいと、かように思っています。

【都委員】 済みません、最後にちょっと。

【近藤文化庁長官】 一中さん、どうぞ。

【都委員】 今、美術の方ではできたんですけれども、やっぱり岡倉天心という人がいたからで、音楽の方では全くできていなくて、きょう、僕みたいな日本の音楽の者がここにいるということ自体が非常に稀有（けう）なことではないかと思います。

さっき青柳先生がおっしゃった、日本の音階を文部省が変えた。これは、非常に日本の音楽界にとっては恨み骨髓で、芸大も邦楽科をなくそうかみたいな話が。

【宮田委員】 ないです。

【都委員】 日本の音楽は置き去りにされている部分があるんですけれども。実は、僕は秋元さんが率いていらっしゃるというのかな、AKB48の歌を一瞬ラジオで聞いたときに、先週申し上げたんですけれども、日本の伝統音楽がここに正に生きているというふうに思いました。それはなぜかという、皆さんの歌がちょっとばらばら。あれが地謡の歌い方であり、お経の声明の唱え方であり、我々の連歌の連れ、やり方であり、あれがウィーン少年合唱団みたいにきれいなハーモニーを作っていたら、みんなもっと気持ち悪くてですね。

ただ、それを僕たち、例えばお能の世界でも、例えばAKBの女の子たちが音楽とは何なのか、人間の真実は何なのか、そこに何を、愛とは何なのかということ、あと40年間あの歌で磨きに磨いていくと、何かそこに文化ができると。それが能であり、我々の音楽でありと。

だから、日本の伝統文化というのは、実は皆さんが今好んで聞くものの中に何千年と生きて、2000年前の今王先生がおっしゃったけれども、雅楽でも、もうとうに唐という国自体がないんですから、全くないものが日本では今でもライブで2000年前のものが聞けると

というのは世界的に稀有なことですし。それで、能が武家の式楽になっても、またこれがずっと生きて、雅楽もなくならない。また、三味線音楽がはやっても、能もなくならない。

そういうふうに、本当に廃仏毀釈のように、日本の音楽は文部省から完全に排除されて、それで西洋音楽一辺倒になっても、まだこういう人がやっていたりなんかできる、そういう人がわずかながらいるので、本当に風前のともしび、消滅の危険性が極めて明らかなか中節なんですけれども。そういうのが日本の文化で、実は音階も、小室哲哉さんの曲とかは完全な律音階でしたし、吉田拓郎さんの歌とか、完全な民謡音階の歌が多かったですし。踏んでも蹴ってもなくならないもので、意外と文部省唱歌はちょっとよそ行きなときに歌うというか、ちょっと背伸びしたときに歌うという。本当に本音だったら、やっぱり古賀政男さんのメロディーとか、都節音階とか、ああいうのがちょっと何かのときは心を許してできたり。

それから、リズム感も、日本人は二拍子系ですから、三拍子のリズムはなかなか浸透しないですね。古賀先生は昔朝鮮で育っていたので三拍子が多いんですけれども。そういうことがありますから、日本の文化は今のみんなの中にも常に生きているんだということを自覚できると思います。

【近藤文化庁長官】 エバレットさん。

【エバレット委員】 じゃ、ちょっと一言、3点。やっぱり音楽の力、日本人のリズム感を取り戻す事が重要でしょう。

2つ目、日本文明が大きな被害を受けたのは、明治のころ。また戦後。戦後の事はまだデリケートですけど、その以前、明治初期の出来事、実際あのころ何が起こったのかをもっと議論するべきだと思います。神仏分離、農耕制度など、見直しできる重要なポイントがあります。

それで、最後に、先週ここに来るときに、ちょうど下の1階の広場のところに横笛の音楽が聞こえた。ああ、これがさすが文化庁だなと思って。文化庁の文化鑑賞のイベントや文化芸術立国のための勉強会を広げてみてはいかがでしょうか。以上です。

【近藤文化庁長官】 もう時間ですので。

それでは、福井副大臣、よろしく願いいたします。

【福井副大臣】 秋元先生はじめ、キャタリストといいますが、きっかけを早く作らないといけないということで、ちょっと霞が関文化から申し上げますと、昭和22年にGHQが日本政府をして廃止せしめたものが3つございまして、1つ目が内務省、2つ目が財閥、

3つ目が何と町内会なんですね、町内会。町内会をわざわざ GHQ が日本政府をして廃止せしめたというぐらい、日本のガバナンスの本質が町内会だったと。向こう 3 軒両隣、十五、六人のコミュニティーが天皇陛下をトップとする日本を支えてきたということを GHQ が知ったわけでございます。

その後、もちろんコミュニティー活動とか、いろいろありますけれども、しかし、日本のガバナンスの本質としての隣近所という人間関係が失われたということが……。幾らも、何回も仕掛けたんです。国民運動を何回も仕掛けて、都市再生本部を作って、中心市街地活性化本部を作って、何回も何回も仕掛けたんだけど、結局国民的な広がりというのは作れなかったというのが霞が関文化の大きな反省でございます。

きょうをきっかけに、防災運動とか、文化普及運動とか、あるいは和菓子でも何でもいいですけども、とにかくそのきっかけを作るという作業をそろそろ霞が関文化にビルトインしなさいという業務命令にきょう聞こえましたので、しっかりとやらせていただきたいと思えます。

もう一つ、実は私は、専門は都市計画の土木屋の国家公務員でございます。宮田先生にそういう指摘をしていただくと、切腹して国民に謝罪しなければならないと思えますが、しかし、事実関係をちょっと御紹介します。昭和 55 年から、都市計画を建設省と文化庁と一緒にやりまして、歴史的地区環境整備事業、萩のまちを伝統的建造物群と道路とが一緒になってやりましょうということを始めました。歴史的道筋整備事業をやりました。そして、首里城は正に公共事業で国営公園整備事業という、正に 500%根こそぎ公共事業なんです。竜脈がわいてくる、ここで政治をやったというのを復元しておりますし。今、東京駅も辰野金吾が設計したそのままを復元しているということがあるんです。

じゃ、何でこの状態、何でこんな劣悪なまちなんだということだと思えます。これは、実は全国 50 万事業所、600 万人、建設業に携わっている人がいまして、やっぱり全員が審美眼を持っているかと、もちろんノーなんです。その底上げといいましょうか、その隅々までいわば土木作業員が審美眼を持ってまちをつくっていく、建物を建てていくということについて、やはり怠っていたということだと思えます。ですので、これは別の役所、国交省になりますけれども、しかし、もといたところなので、しっかりとやらせていただきたいと思えます。済みません、以上でございます。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。では、大臣、お願いいたします。

【下村文部科学大臣】 ありがとうございます。今回も非常に面白く、刺激的な話が

ずっと続いておりまして、大変に興味深く、もっとお聞きしたいなという思いがしております。なぜ文化芸術立国を目指すのかということ、教育的な観点からちょっと簡単に最近感じたことについてお話し申し上げたいと思います。

5月の連休に、ワシントンに科学技術担当閣僚会議というのがございまして、行ってまいりました。その間を縫って、アメリカのチャータースクールを是非見たいということで、視察に行ってきました。アメリカでも、公立学校について不満を持っている人たち、地域の住民とか、教員とか、そういう人たちが、公立学校ではあるんですが、日本でいう私立学校的な、チャーターということになっていますが、学校を造っているということで、ワシントンではこれが4割を超えていると。

その中でも、特に前年度、オバマ大統領も視察をしたという、非常に成果を上げているチャータースクール、そこは小学校1年生から高校3年生までおりましたけれども、行ってまいりました。子供たちが、小学校1年生は全員が手を挙げて質問したり答えたりするという積極的な教育がされていまして、高校3年生はレベルが高くて、それは偶然だというふうに思いますが、行ったクラスで広島原爆について幾つかのグループセッションに分かれて、トルーマン大統領の立場とか、それから裕仁天皇の立場とか、軍隊の立場とか、それぞれの部分に分かれて、それぞれの立場でディスカッションするというようなことをしておりました。これは、日本の高校教育ではとてもやらないし、できないし、そういうことをしているということで非常に刺激的でございました。

一方で、つい先日、天皇皇后両陛下が江東区にある越中島小学校というところへ行幸啓に行かれるということで、私も一緒にお邪魔をさせていただきました。ここで、小学校3年生と小学校6年生が俳句を作るということで、3年生のクラスは俳句の季語を提示されて、それでどういうものを作るかということを議論しておりました。小学校6年生のクラスでは、作った俳句について、別の子供たちが、この俳句のすばらしいところはどうかということ、これを他者が評価すると。

それぞれ、本当に日本人の子供の持っている情操感とか感性というのはすばらしいなというのと、空間的にいうと、実はその越中島小学校というのは、最初視察に行くときは、平均的な日本のといたしますか、東京の学校を天皇皇后両陛下が見学、視察をされたいということで選ばれた学校だと聞いていたのですが、実際、江東区の区長に聞くと、かなりレベルの高い学校だというのは実際のところは言っていました。それでも、普通の区立の小学校には違いないんです。

私はアメリカのチャータースクールに負けないというか、それ以上の日本人のこの小学生の持っている感性、感覚と、それから、昔は確かに一方的な先生の授業で講義形式でしたけれども、日本の子供も積極的に、意欲的に手を挙げて、すばらしいなど。その空気というか、空間ですけれども、それはアメリカのトップレベルのチャータースクール以上に、普通の日本の小学校の方が、実は質的にといたしますか、子供たちの感性、感覚からいうと、はるかにすばらしい DNA を持っているのではないかというような——これは感覚の問題ですけれども、そういうものを改めて気づかされた感じがしたんです。

ところが、これは毎年調査をやっているんですが、国立青少年研究所が4か国の意識調査をしております。高校生の意識調査で、今年の調査は、2012年は、日本の高校生で、自分は駄目な人間だと思う、あるいは、どちらかというところに近い、イエスと答える高校生が87%もいるんですね、87%。2009年の4か国の調査ですと、自分は駄目な人間だと思うかと、イエスと答える高校生、中国の高校生は12%、アメリカが23%、韓国が35%、日本は66%なんです。つまり、小学生のころは生き生きと活気がある雰囲気の子供が、中学生になると、それから高校生になると、自分は駄目な人間だと思う子供がどんどん増えている。これがある意味では、我が国の教育の現状だというふうに思います。一人一人のそういう子供たちの持っているものを生かし切れない。逆につぶしてしまっているというか、ふたをしてしまっている。

これは、実は日本だけでなく、先進国、似たような……。やっぱりワシントンに行ったときに、科学技術の会議だったんですが、フランス人の人から、フランスでも今ニート、フリーターがいて困っていると。日本はどういうふうになっているんですかと。これは、どこの先進国でもそういうニート、フリーターとか、引きこもりとか、先進国の共通の若い人たちの問題として言えますが。こういう新たな切り口として、今の学校教育システムというのは、今までの近代工業化社会を支える人材づくりでしたけれども、本当に求められるのはそういう人材ではなくて、正に一人一人のクリエイティブな感性、感覚、あるいは人間的な心、思いやり、情操感、そういうことをいかに育むような教育をしていくかが問われているんだろうというふうに思いますし、それは本来、日本が持っていたものだと思うんです。

ですから、先ほどの文化芸術は既に立国であるというお話もありましたが、しかし、ほかの国から比べると恵まれてはいると思いますが、その資源が生かされていないし、あるいは気づいていないし、あるいはそれが発揮されていないというところが、やっぱり日本

の問題点だというふうに思います。

これから、教育も抜本的に変えるということであれば、正に文化芸術的な視点から子供たちの持っているものをどう引き出しながら、小学生のような、この間感じたような生き生き感なり、わくわく感を、中学生になっても、高校生になっても、それから大人になっても持ち続けるようなことを教育でどうできるかということが、我が国の本質的な問題点だというふうに思います。

そのアプローチの最大の共有感ができるのが、やっぱり文化芸術的な発想で、子供たちにそういう環境の中で提供できるかどうかということだというふうに思いますので、これは我が国にとっては大変大きな課題であるというふうに思います。そういう視点からアプローチをするということは、実は世界先進国がどこでも悪戦苦闘しながら教育について悩んだり、苦しんでいることの証左でもあるというふうに思いますので、そういう視点からアプローチをこれからしていく重要なテーマだと思います。

今回は、先週と、今回と、2回にわたって、とりあえずは来年度の概算要求に是非反映をさせていただきたいということもあって、2回連続でこの土曜日の午前中の大変に公私ともにほかにもっと活用したいときだったと思うんですが、無理してお越しいただきました。

また、是非機会を設けて、毎週ということではございません、月に1遍とか、2月に1遍とか、引き続きそういう本来の、あるいは先進国が共通にこれから必要とされる、教育的なアプローチも含めた文化芸術のあるべき形ということを、是非更に深めて御議論いただきながら、また御提言をしていただければ、これはいろいろな分野に生かされると。安倍内閣における経済再生の次に教育再生。しかし、教育再生の中でも大変重要な、本質的なことであるというふうに思いますので、是非御協力、御理解を引き続きお願いできれば大変有り難いと思います。きょうは貴重な機会をありがとうございました。

【近藤文化庁長官】 ありがとうございます。それでは、今の大臣のお話もございましたように、この有識者会議といいましょうか、懇親会は今後とも折に触れて開催させていただくと。しかし、同時に、文化庁としましても、先ほど御紹介したファシリテーターの会議のように、できるところからやっていく。そして、予算が必要な場合には、来年度の概算要求から要求をしていくということでアクションを行いながら、引き続き先生方の貴重な御意見を頂いて、この有識者会議は2020年まで続けるということでしょうか。

それはともかくとして、そういった形でアクションと御提言、これを同時並行的に進め



ていくというようなことで、現時点での今後の見通しというふうにさせていただければと思います。

本当に皆様、土曜日の午前中、お忙しい中をお越しいただきまして、誠にありがとうございました。心からお礼を申し上げます。

— 了 —